

新発田川は水のみち

◆大量輸送は新発田川に限る

新発田川は、藩政時代に人工的に改修が行われ、新発田城濠の水に取り入れられるが、城下の町人町の東南方向から西北方に縦断し、新発田藩時代の交通は河川利用が主であった。陸上交通では大量の物資の輸送が出来ず、多数の人を乗せての輸送を含めもっぱら舟を利用した。新発田藩領内には、信濃川、阿賀野川、加治川、その他大小の河川が流れ、新潟港から日本海に通ずる海上輸送ができたため河川交通が発達した。

下流の舟入（現在住吉町一丁目付近）には、藩の沼垂の米蔵に納める年貢米を舟で運搬する集積場、米蔵があった。また、新潟方面からの荷物が運ばれてくるなどで、舟の発着場であり、倉庫も数棟建てられ、船頭衆などで賑わった所である。

◆丸太がどんぶら

藩政時代には、会津藩領の滝谷、赤谷等の山手の村々の人達により、春雪のころ山で伐採した薪用の割り木用材、長さ約50cm～70cmの丸太を秋になると加治川から新発田川にバラにして流したのを「流木流し」といった。この薪で城下町の人達は燃料の殆どを賄ったのである。新発田では武士も町人も薪を流木に依存していた。

◆長木に乗って川を下る

「筏流し」は、長木を束ねてくみ、加治川、新発田川で流した。筏には人足が乗り新発田の材木商の所まで運んだのである。新発田川には大堰があって、この堰をはずさないと下流へ流すことが出来ない。筏流しがくると、堰板をはずした。この堰板をはずすと上流の水は一挙に下流に流れ、一メートル余の水はたちまち川床が出るくらいになる。筏流しは、昭和初期頃まで見られたが、いつしか貨物自動車等の陸上輸送となっていく。



舟入の船着場（明治中期）

◆コラム「水あふりで盛り上がる」

夏の遊びで人気があったのは水あぶり（水泳）である。当時、新発田川は水量も多く、川底は砂地できれいな川だった。清水谷や萬橋付近等、小さい子どもたちが、たらいなどを持出して遊んでいた。

しかし、何と言っても多勢集まって泳いだのは川上の大堰だ。町の子ともたちが、四、五人ずつ小集団で集まってきて、一日中にぎやかにさわいでいたもので、夏休みともなれば河童天国であった。

今と違って川幅も広く水もきれいで大正年間にはアユも上がるほどだったから親たちも別段心配する様子もなかった。



筏流し 清水園付近（明治後期）